（2 月　29 日）「使徒言行録 11：27～30」

そこで、弟子たちはそれぞれの力に応じて、ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決めた。

（使徒言行録 11 章 29 節）

・飢饉や自然災害、また戦争などの争いによって傷つけられた、苦しんでいる人たちが、今も世界中におられます。奈良基督教会ではこの 1 月・2 月に能登半島地震の被災者のために義援金を集めています。

・このような活動は、初代教会から続いていることです。今日の箇所には大飢饉が起こった際に、弟子たちが援助の品を集めて届けたという記事が載せられています。遠くに離れた人のことを思い起こし、行動を起こすのです。

・そして聖書には、「それぞれの力に応じて」とあります。裕福な人だけが頑張ればいいというのではありません。レプトン銅貨 2 枚を献げたやもめ（ルカ 21：1～4）が褒められたように、皆が「できることをやる」のが大事なのです。

2024 年 2 月

使徒言行録　　通　読

2 月

（2 月　1 日）「使徒言行録 7：23～29」
それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。
（使徒言行録 7 章 24 節）

・ステファノは説教を続けます。次に語ったのは、モーセが 40 歳になったときの話です。モーセはファラオの手を逃れるため、生まれて三か月後に川に流されました。それを拾い上げたのは、ファラオの王女でした。
・モーセはその王女の子として育てられ、教育も受けてきました。ただ自分がイスラエル人であることは、知っていたようです。彼はイスラエルの人々に会うために出掛けますが、そこで目にしたのは、彼らが痛めつけられている現状でした。
・それを見たモーセは思わず、エジプト人を打ち殺します。ところがそのことは、他のイスラエルの人々に対して恐怖を与えます。彼はそのため、ミデヤンの地に離れざるを得ませんでした。モーセの思いは、イスラエルの人々には届きませんでした。

（2 月　2 日）「使徒言行録 7：30～35」
そのとき、主はこう仰せになりました。『履物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる土地である。　（使徒言行録 7 章 33 節）

・モーセはその後、燃える柴を目にします。モーセの前に現われたのは、出エジプト記では「主の使い」でした。しかし、使徒言行録では「天使」となっています。ルカ福音書にも天使（ガブリエル）が登場していました。
・ステファノは、モーセが神さまから語りかけられた場面を話します。神さまはイスラエルの人々を救うために、モーセを遣わすと言われました。出エジプト記にはモーセが何度も拒んだことが書かれていましたが、彼はそのことについては言及していません。
・神さまが言った、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である」という言葉は、神さまの救いの計画が連続性を持っていることを示します。その計画は、どこまで続いて行くのでしょうか。

（2 月 27 日）「使徒言行録 11：11～18」
そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。
（使徒言行録 11 章 16 節）

・ペトロの状況説明は続きます。「ちょうどその時」とペトロが言うように、神さまが定めたタイミングで物事は進んでいきました。「何事にも時があり天の下の出来事にはすべて定められた時がある」（コヘレトの言葉 3 章 1 節）を思い起こさせます。
・ペトロはさらに、「あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける」というイエス様の言葉を引用します。洗礼者ヨハネだけでなくペトロなど人間は、水によって洗礼を授けます。しかし神さまは、聖霊を直接与えてくださるのです。
・その神さまのみ業を、どうして妨げることができるだろうかとペトロは続けます。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（マルコ 8：33）と言われたペトロが、神さまによって変えられているのです。そしてペトロの言葉は、受け入れられました。

（2 月 28 日）「使徒言行録 11：19～26」
しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。　（使徒言行録 11 章 20 節）

・「ヤベツの祈り」をご存じでしょうか。歴代誌上 4 章 9～10 節にあるもので、これを元にした本もいくつか出されています。簡単にいうと、「どうぞわたしが用いられる場所にわたしを遣わしてください」という祈りです。
・様々な場所に散らされた人々は、それぞれの地で福音を伝えていきます。最初はユダヤ人以外の人にはみ言葉は伝えられていませんでしたが、それがギリシア語を話す人にまで福音が伝えられていきます。
・そこにバルナバが遣わされます。彼は回心したサウロをエルサレムで引き受けた人物です。彼はサウロを捜し出し、教会で一緒に教えていきます。そしてその福音を信じた人たちは、「ユダヤ教の一派」ではなく「キリスト者」と呼ばれるようになっていきます。

（2 月 25 日）「使徒言行録 10：44～48」
割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。
（使徒言行録 10 章 45 節）

・使徒言行録 8 章 14～17 節には、フィリポが洗礼を授けたサマリアの人たちにペトロとヨハネが聖霊を降らせた記事が載せられています。今日の箇所は、どうもそのときとは逆になっているようです。
・み言葉を聞く中で、聖霊が一同の上に降りました。その中には、異邦人であるコルネリウスも含まれていたのです。洗礼を受けていない、しかも異邦人の彼の上にも聖霊が降ったのは、人々にとって驚きでした。
・神さまの恵みは、人間の思いをはるかに超えて驚くべき形であらわされます。わたしたちにも、どうしてこのようなことになるのかわからないといった経験があると思います。しかし神さまの目から見たら、すべて決められていたことなのかもしれません。

（2 月 26 日）「使徒言行録 11：1～10」
ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。
（使徒言行録 11 章 2～3 節）

・う～ん。いつの時代もこういう人たちっていますね。自分たちが守ってきたことだけが正しいと信じ、他の人の行為を認めない人たちが。割礼を受けていた人たちは、ペトロが異邦人と食事をしたことを非難しました。
・ペトロはその非難に対し、「順序正しく」説明することを選択しました。非難に対して非難を返すのではなく、何があってこうなったのかということをきちんと伝えます。そしてその背後には、神さまの思いがあったことも告げるのです。
・「わたしはこう思う」、「今までもこうしてきた」、その主張も確かに大切です。しかし神さまのみ心はどうなのか、自分の思いを大事にすることによって人を排除していないのか、そこに目を向けることも必要なのでしょう。

（2 月　3 日）「使徒言行録 7：36～43」
この人がエジプトの地でも紅海でも、また四十年の間、荒れ野でも、不思議な業としるしを行って人々を導き出しました。
（使徒言行録 7 章 36 節）

・モーセはエジプトを出る際、ファラオとエジプトに「十の災い」をもたらしました。そのたびに神さまはファラオの心を頑なにします。それはこれらの出来事によって、主の栄光があらわされるためだという説明がありました。
・しかしステファノは、これらの一つ一つの出来事には触れません。エジプト中の初子が打たれたことや、紅海が二つに割れてエジプトの軍隊が海の底に沈んでしまったことなど、語る内容はいろいろあったと思います。
・しかしここでステファノが語ったのは、イスラエルの人々の不平不満についてでした。さらにアロンに金の子牛の像を造らせ、いけにえを献げたことを語ります。そのことが、バビロン捕囚へと続いていったことも合わせて語るのです。

（2 月　4 日）「使徒言行録 7：44～50」
けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりです。
（使徒言行録 7 章 48 節）

・イスラエルの人々は、エルサレム神殿を大切にしていました。その神殿を最初に建てたのは、ソロモンでした。ソロモンの父ダビデはイスラエルの偉大な王でしたが、神殿を建てることはできませんでした。
・神殿が出来る前は、イスラエルの人々は神さまに命じられて幕屋を造り、そこで神さまを賛美していました。しかしステファノは預言者の言葉を引き合いに出して、このように語ります。「神さまは人の手で造ったものにはお住みにならない」と。
・神殿は、人が造ったものにすぎません。このステファノの言葉は、わたしたちにも響きます。建物としての教会を大切にすることは、確かに大事なことです。しかしそこだけに神さまが住んでいるわけではないということも、覚えておきたいものです。

（2 月　5 日）「使徒言行録 7：51～53」

かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。　（使徒言行録 7 章 51 節）

・ステファノは説教の最後に、イスラエルの人々を非難します。出エジプトの際にモーセと神さまに対して背き続けてきたイスラエルの人々を引き合いに出し、「あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています」と指摘するのです。
・自分たちが信じ、正しいと思って来たことを否定するのは難しいことです。しかもステファノは「使徒」ではなく、執事に任命されたばかりの人でした。そんな人に何が分かるのか！と人々は思ったことでしょう。
・わたしたちも、同じようなことにならないように気をつけないといけません。自分の思いとは違う物を否定し、排除する。わたしたちがしがちなことです。ただそれが、聖霊、つまり神さまの思いに逆らっていることもあるのです。

（2 月　6 日）「使徒言行録 7：54～60」

それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。
（使徒言行録 7 章 60 節）

・「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」というステファノの言葉は、人々にさらなる怒りを引き起こしました。神さまと人の子が見えるというのは、神を冒涜することに当たると考えられていたからです。
・冒涜の罪を犯した人には、石打ちの刑が待っていました。彼らは石を取り、ステファノを殺害します。しかしその中でステファノは、「この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫ぶのです。
・この言葉は、イエス様が十字架上で叫ばれた「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と響き合います。その光景を、サウロという若者が見ていました。このサウロこそ、のちにパウロと呼ばれていく人物です。

（2 月 23 日）「使徒言行録 10：24～33」

それで、お招きを受けたとき、すぐ来たのです。お尋ねしますが、なぜ招いてくださったのですか。
（使徒言行録 10 章 29 節）

・ペトロがコルネリウスの元に到着したとき、コルネリウスはペトロの足元にひれ伏しました。もしこのときペトロが、「ユダヤ人は選ばれた民で偉いんだ」という気持ちがあったなら、そのまま立ってコルネリウスを見下ろしていたことでしょう。
・しかしペトロはコルネリウスを起こし、「わたしも同じ人間です」と言います。「神が清めた物を、清くないなどと言ってはならない」と言われたことを、ちゃんと理解して行動に移しているペトロはすごいなと思います。
・わたしも他宗教の人たちと交流することがあります。最初はとても緊張しますが、時間が経つにつれて打ち解けていくのがわかります。ペトロもそのように感じたのでしょうか。ただ「お招きをうけたとき、ためらわずに来た」というのは、「え？」と思いましたが。

（2 月 24 日）「使徒言行録 10：34～43」

そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。　（使徒言行録 10 章 34 節）

・旧約聖書の考え方は大雑把にいうと、「神さまはイスラエルの人々を選ばれた。救いはまずイスラエルの人々に与えられる」ということです。旧約に出てくるイスラエルに敵対する民族に対する裁きや「約束の地」という考え方には、胸が苦しくなることもあります。
・しかしペトロが気づかされたように、神さまは「分け隔てなさらない」方なのです。神さまはえこひいきすることなく、すべての人たちを愛されています。そしてその中には、わたしたちも含まれるのです。
・民族宗教である「ユダヤ教」から、すべての人たちを救いに導く「キリスト教」への転換が、ここに見られます。わたしたちも閉鎖的な教会ではなく、すべての人を迎え入れる開かれた教会を目指していきましょう。

（2 月 21 日）「使徒言行録 10：9～16」
すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない。」
（使徒言行録 10 章 15 節）

・コルネリウスは天使が言った通りに召使いと兵士を遣わして、ペトロを招こうとしていました。その同じとき、ペトロには幻が示されました。彼が見たのは、天が開き、大きな布のような入れ物が四隅でつるされ、降りてくる様子でした。
・中に入っていたのは、四つ足の獣、地を這うもの、空の鳥でした。レビ記 11 章には食物規定が書かれていますが、たとえば豚は汚れているもの、禿鷲は忌むべきものなので食べてはいけないとされていました。そのため、「食べなさい」という声にペトロは躊躇します。
・そのペトロに対し、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」という声が聞こえてきます。人間の思いを超えた神さまの思いが、ここに示されています。これも、「新しい契約（新約）」なのです。

（2 月 22 日）「使徒言行録 10：17～23」
立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。
（使徒言行録 10 章 20 節）

・ペトロは生粋のユダヤ人でした。昨日の箇所では食物規定について書かれていましたが、他にも大切にされてきたことがあります。それは異邦人（ユダヤ人以外の人）とは関わらないということです。
・コルネリウスは、ローマ兵の百人隊長です。つまりガチガチ？の異邦人です。その彼の使いがペトロの家に来るのです。もし幻を見ていない状況であれば、彼はその使いを追い返したかもしれません。
・しかし神さまは、イエス様によって始まった新しい契約がどのようなものか、霊を使ってペトロに伝えようとしていました。ペトロは異邦人の使いである 3 人を、迎え入れて泊まらせました。ペトロが神さまによって、変えられていくのです。

（2 月　7 日）「使徒言行録 8：1～3」
一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。
（使徒言行録 8 章 3 節）

・ステファノの殺害現場に立ち会い、人々の上着の番をしていた若者サウロは、のちにパウロと呼ばれる人物です。彼は生粋のユダヤ人ファリサイ派として、エルサレムの教会に対して激しい迫害をおこなっていました。
・パウロがローマやコリント、エフェソなどの教会に送った手紙を読むと、そのような過去があったことなどなかなか信じられません。しかし使徒言行録は、パウロのいわゆる「過去の汚点」もあらわにします。
・それはわたしたち人間にとって、イエス様との出会いによって変えられることが何よりも大事だからです。あのパウロでさえも、最初から完璧な人間だったわけではありませんでした。わたしたちも、変えられるのです。

（2 月　8 日）「使徒言行録 8：4～8」
群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に聞き入った。
（使徒言行録 8 章 6 節）

・ステファノが殺害された後、使徒以外の人たちはユダヤとサマリアの地方に散ります。その中にフィリポという人物がいました。彼は 6 章 5 節で、ステファノらと共に「執事」として任命された人物です。
・ステファノの死によって、フィリポたちの行動は変わったのでしょうか。答えはノーです。彼らは散った先々で、み言葉を宣べ伝えていきます。フィリポはキリストを伝えるとともに、数々のしるしもおこないます。
・一緒に行動していた人物が殺害され、そしてエルサレム教会にも迫害が及んでした状況の中でも、彼らは宣教をやめようとはしませんでした。いろいろな「できない」理由を考えて宣教をおざなりにしてしまうときにこそ、この箇所を思い起こしたいと思います。

（2 月　9 日）「使徒言行録 8：9～13」
しかし、フィリポが神の国とイエス・キリストの名について福音を告げ知らせるのを人々は信じ、男も女も洗礼を受けた。
（使徒言行録 8 章 12 節）

・サマリアの町に、シモンという人物がいました。イエス様の弟子である「シモン・ペトロ」とは別人です。サマリアのシモンは、長い間魔術を使って人々を驚かせ、偉大な者だと言われていました。
・しかしフィリポが福音を伝えると、人々はそれを信じて洗礼を受けていきます。フィリポによって人々の目が開かれ、魔術ではなく真理を受け入れることができたというのでしょう。魔術による驚きと信仰とは、まったく別のものなのです。
・シモン自身も、フィリポから洗礼を受けます。一見すると、シモンは神さまの前に悔い改め、シモンの弟子になったように思えます。しかしそこには、よこしまな心がありました。明日以降の箇所に、その内容が書かれて行きます。

（2 月 10 日）「使徒言行録 8：14～17」
ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。
（使徒言行録 8 章 17 節）

・日本聖公会は、主教制を敷いています。主教の働きの一つに、信徒按手というものがあります。洗礼は各教会の牧師が授けますが、主教巡回のときに「堅信式」をおこないます。その中で「聖霊を満たしてください」と、主教が信徒の頭に手を置きます。
・執事であったフィリポの洗礼は、イエス様の名によって授けられたものでした。その洗礼を受けた人々の元に使徒であるペトロとヨハネが行って手を置くことで、聖霊が降ったということです。
・日本聖公会に所属する立場としては、主教が巡回して洗礼をすでにうけている信徒に按手する流れが想起され、特に違和感はありません。しかし主教制をとらない教派にとっては、議論が分かれるところだと思います。

（2 月 19 日）「使徒言行録 9：36～43」
ペトロが皆を外に出し、ひざまずいて祈り、遺体に向かって、「タビタ、起きなさい」と言うと、彼女は目を開き、ペトロを見て起き上がった。
（使徒言行録 9 章 40 節）

・ペトロの「奇跡物語」が続きます。ペトロはヤッファのタビタという女性の元に呼ばれて行きます。彼女は数々の善い行いや施しをしていた人物でした。彼女がどれほど人のために奉仕してきたかは、やもめたちの姿を見ればわかります。
・ペトロは祈り、「タビタ、起きなさい」と言います。この場面は、イエス様がヤイロの娘に対して「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた（ルカによる福音書 8 章 54 節）と重なって聞こえます。
・つまり聖書が伝えたかったのは、ペトロが奇跡行為者になったということではなく、イエス様の業が弟子たちによって継続されたということなのではないでしょうか。あくまでも人々の間で働かれるのは、イエス様だということなのです。

（2 月 20 日）「使徒言行録 10：1～8」
彼は天使を見つめていたが、怖くなって、「主よ、何でしょうか」と言った。すると、天使は言った。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。
（使徒言行録 10 章 4 節）

・使徒言行録には、サマリアの人やエチオピアの高官に福音が伝えられていった話が載せられていました。救いはいわゆる「異邦人」（ユダヤ人以外の人）の元にも届けられていくのです。そして今日から始まる 10 章で、そのことが決定づけられます。
・カイサリアのコルネリウスはイタリア隊の百人隊長でした。イタリア隊はローマ帝国に属している部隊です。彼は当然、ユダヤ人ではありません。しかし彼の家族は絶えず神さまに祈っていました。
・神さまはコルネリウスに天使を遣わし、ペトロを招くように伝えます。異邦人であるコルネリウスがペトロの元に行くのではなく、ペトロに異邦人の家に来るように招きなさいというのです。さてペトロはどのような反応をするのでしょうか。

（2 月 11 日）「使徒言行録 8：18～25」
すると、ペトロは言った。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。
（使徒言行録 8 章 20 節）

・シモン（ややこしいですがペトロではありません）は、ペトロがサマリアの人々に手を置き、聖霊を降らせたのを見て、自分にもその力を授けて欲しいと願います。しかもシモンは、ペトロにお金を差し出すのです。
・何としても彼は、自分も手を置けば、誰かに聖霊を与えられるようになりたかったということでしょう。自分の地位を上げるためでしょうか。それともお金儲けを企んでいたのでしょうか。
・わたしたちもシモンのように、「力」を手に入れたいという欲求を起こすことがあるでしょう。しかしお金を払ってということはないとしても、「人に認められたい」、「人にはない力を手に入れたい」と願うことは、神さまの目には「悪事」と映ることもあるのです。

（2 月 12 日）「使徒言行録 8：26～33」
さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。
（使徒言行録 8 章 26 節）

・続いてフィリポは、エルサレムからガザに下る道を行くように告げます。ガザという地名を聞くと、今もそこで苦しんでいる人たちのことを思い出します。主の天使がフィリポを遣わしたように、神さまの愛がその地にいる人たちの元に注がれますように。
・フィリポが出会ったのは、エチオピアの高官でした。彼はエルサレムに礼拝に来ていた帰りでした。彼が朗読していたのはイザヤ書 53 章でした。しかし手引きをしてくれる人がいないから理解できないとその高官は言います。
・教会の礼拝に、新しい方が来られることがあります。何も言われずに帰られることも多いのですが、様々な疑問を持たれることもあります。わたしたちにも、手引きができるのではないでしょうか。わたしたちも、フィリポになりましょう。

（2 月 17 日）「使徒言行録 9：26～31」
こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。
（使徒言行録 9 章 31 節）

・エルサレムにやって来たサウロですが、他の弟子たちはサウロを恐れます。それも無理はありません。つい先日まで自分たちを迫害していた人物です。何かの罠だと思っても仕方ないでしょう。
・そこに登場したのがバルナバです。バルナバは「慰めの子」と呼ばれます。彼はダマスコでのサウロの回心やそこでの宣教の様子を伝えます。その結果エルサレムの弟子たちは、サウロを受け入れることができたようです。
・教会にも「バルナバ」のような人物がいたら、とても心強いです。新しく来た人がいればその人のことを伝え、その人が教会に受け入れられていくように導く。バルナバがいなかったら、サウロはどうなっていたのでしょうか。

（2 月 18 日）「使徒言行録 9：32～35」
ペトロが、「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」と言うと、アイネアはすぐ起き上がった。
（使徒言行録 9 章 34 節）

・ルカによる福音書 5 章 17～26 節には、イエス様が中風の人（新しい聖書では「体の麻痺した人」）をいやす物語が載せられています。屋根の上から病人を床ごと降ろした物語だというと、「ああ、あれか」と思う方もおられるでしょう。
・ペトロは 8 年間中風で床についていたアイネアをいやします。その時に言った「自分で床を整えなさい」という言葉は、ルカ福音書の中でイエス様の言われた「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」を思い起こさせます。
・そして聖書をよく読んでみると、ペトロは自分の力でアイネアをいやしたわけではないことにも気づかされます。ペトロは「イエス・キリストがいやしてくださる」と告げます。自分ではなくイエス様が働かれる、それがとても大事なことなのです。

（2 月 13 日）「使徒言行録 8：34～40」
そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの個所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。
（使徒言行録 8 章 35 節）

・エチオピアの高官が読んでいたのは、イザヤ書 53 章の「苦難の僕」と呼ばれる箇所でした。日本聖公会の礼拝でも、受苦日や復活前主日に用いられることが多い箇所です。「屠り場に引かれる小羊」という言葉が、胸に刺さります。
・奈良基督教会の洗礼盤の側面には、十字架を背負った小羊が彫られています。イエス様についての福音は、この「十字架を背負う小羊」に凝縮されていると言ってもいいと思います。フィリポはそのことを説き明かしました。
・フィリポは、「伝道者フィリポ」と呼ばれていきます。それはこの箇所のように、人々に福音を告げ知らせていったからです。執事として任命され、福音を告げ知らせ、洗礼を授けていく。彼はその働きをずっと続けていきます。

（2 月 14 日）「使徒言行録 9：1～9」
サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。（使徒言行録 9 章 4 節）

・ステファノが殺害されるときに、近くで上着の番をしていた青年サウロが再び登場します。そのときにも書きましたが、彼はのちに「パウロ」と呼ばれ、多くの手紙を書き残した人物です。
・しかし彼は当時、先頭に立って教会を迫害していました。ユダヤ人ファリサイ派の彼は、それが正しいことだと思っていたのです。そのような中、天からの光が彼の周りを照らし、イエス様の声が聞こえてきます。「なぜわたしを迫害するのか」という。
・サウロの目は閉ざされ、そして三日間、彼は食べも飲みもしませんでした。正しいと思っていたことが覆されたとき、わたしたちはどのようにするでしょうか。サウロはきっと心の中で、何度も神さまにどうすればよいのかと問いかけていたことでしょう。

（2 月 15 日）「使徒言行録 9：10～18」
すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」
（使徒言行録 9 章 15 節）

・主イエス様は、ダマスコにいるアナニアという弟子の元に現われます。そこでアナニアに伝えたことは、タルソス出身のサウロという者の上に手を置いてあげなさいというものでした。しかしアナニアは最初、それに対して異論を述べます。
・というのも、サウロが教会を迫害していたことが、アナニアの耳にも入っていたからです。わたしたちも人間的な尺度で、人を批判し、排除しようとすることがあります。しかしサウロの行動は、それが当然だと思えるほどひどいものでした。
・神さまは、わたしたちには到底理解できない計画をおこなうことがあります。「あえてこの人を選ぶ」ということをなさるのです。アナニアに手を置かれたサウロの目から、うろこのような物が落ちました。「目からウロコ」はここから取られた言葉です。

（2 月 16 日）「使徒言行録 9：19～25」
しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。（使徒言行録 9 章 22 節）

・回心したサウロは、イエス様の福音を告げ知らせる者となりました。聖書の用語でもある「回心」とは、180 度心を入れ替えることです。これまでイエス様を否定し迫害していた彼が、イエス様こそ神の子であると宣べ伝えていくのです。
・心を改める、いわゆる「改心」とは違うダイナミックな生き方の転換を、サウロはおこないました。このような「回心」を、聖書はわたしたち一人ひとりにも求めていることを覚えましょう。
・サウロの変化に、周りの人たちは驚きました。それも無理はないでしょう。少し前まで迫害の先頭に立っていたのです。そこに神さまの導きを見出すことができれば良かったのですが、彼らはサウロを殺そうとします。